

鈴虫の巻の構造についての断章

久保重

(一)

定家は「奥入」に、「横笛」・「鈴虫」・「夕霧」・「御法」の四巻の勅物の最後にそれぞれ年次を左記の様に注記している。これは、他の勅物と性格を異にするもので、しかもこの四巻のみに限られている注記である。

よこ笛 柏木の後年也

すゝむし 横笛の同年夏秋也

夕きり 今案此巻猶横笛鈴虫之同秋事歟

みのり 此卷 夕霧之後年歟 (注1)

これは、柏木・横笛・鈴虫・夕霧・御法の年次関係を定家はこの様に読むということであつて、考証ではない。私はこの部分の奥入の見解に悉く賛成したい。後に、一条兼良の「年立」に「鈴虫」を「横笛の翌年として以来、旧注・新注を経て現代の注釈書・解説書

がみな兼良説にしたがっているが、私には、「鈴虫」の巻のあわれは、「鈴虫」が柏木権大納言の一周忌と同年であることに深くかわっていると思われるのである。これについては後に述べる。次いで、私は、「奥入」が、「横笛」・「鈴虫」・「夕霧」の三巻を、「柏木」に後接する一続きの巻々と解しているらしいこと、一歩進めて云えば、この三巻を現在の巻序通りにもともと書かれていたものと認めた上で、柏木死後の後日譚だと解していることに賛意を表したい。私が、柏木死後の後日譚として上記三巻が一グループを形成すると考えるのは、柏木の惹き起した事件とその死との余波が、被害を受けた側の人々の心理と境遇の上に、どの様に収束されて終るかが述べられて行くところに一貫性が見出されるからである。

「横笛」は柏木の一周年で始まる。源氏と夕霧はそれぞれ厚い志を見せる。源氏は、心秘かに薫の分として、別に、黄金百両を寄進する。薫は歩き始めた頃で

頭は露草してことさらに色どりたらむ心地して、口つきうつく

しうにほひ、まみのびらかに恥づかしうかをりたるなどは、な

展開し、その間に物語を進展させる様な事件は全く起きない。静止

の見解に悉く賛成した。後注 一、多量目録の「五」に「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百」

「横笛の翌年として以来、旧注・新注を経て現代の注釈書・解説書

しうにほひ、まみのびらかに恥づかしうかをりたるなどは、なほいとよく思ひ出でたるれど、かれはいとかやうに際離れたるきよりはなかりしものを、いかでかへらん、宮にも似たてまつらず、今より気高くものしうさまことに見えたまへる気色などは、わが御鏡の影にも似げなからず見なされたまふ。(注2)

その高貴な面差は、むしろ源氏自身に似ていると源氏は思う。そして成育と共に加わるその美質と愛らしさに

「この人の出でものしたまふべき契りにて、さる思ひの外の事もあるにこそはありけぬ。のがれ難かなるわざぞかし」とすこしは思しなほさる。

この美しい児の誕生すべき宿世によつて、柏木密通事件も生じたのであらうかと、源氏には薫をわが子として受容する気持が起ってくる。女三宮に対しては、その尼姿に却つて心を惹かれる半面、「かく思はざりしさまにて見たてまつること」と過去の誤を許し難く思う。他方、夕霧は次第に柏木未亡人の女二宮に思をつのらせ、子沢山で日常的散文的な雲居雁とのわが家庭生活を批判的に見る時もある。秋の頃、女二宮の一条邸を訪れた夕霧は、宮の生母一条御息所から柏木遺愛の横笛を贈られるが、その夜、中有に迷っている柏木が夢に現れて「笛を贈りたい人は他にあった」と云うと見、翌日、六条院に行き源氏に夢の話をする、源氏はその笛は自分が預ると云い、話を打ち切ってしまったことが記されている。

「鈴虫」の巻は、本稿の主題であるので、項をあらためて述べるが、六条院で催される華麗な行事は典雅な行事が、次々と絵巻風に

頭は露草してことさらに色どりたらむ心地して、口つきうつく

展開し、その間に物語を進展させる様な事件は全く起きない。静止的な美的な小品である。しかも、深い抒情性を湛えるうちに、「若菜上」から始つた第二部の中心主題「密通事件を収束し、第一部と関連づけて統合解決しようとする姿勢を見せる」一巻である。前後の二巻と異なるところは、叙述の焦点が終始源氏に合わされている点である。

「夕霧」の巻は、時間的には「鈴虫」の後に続いて、八月中旬からその年の冬に至る。夕霧右大将の女二宮に対する関心は、「柏木」・「横笛」から描かれて来たが、この巻に入って熱狂的のものとなる。宮の母一条御息所は病が重くなり、加持を受けるために女二宮と共に洛北小野の山荘に移る。夕霧にとつては好機到来である。八月中旬、御息所の病氣見舞に小野を訪れた夕霧は、霧が深く立ちこめたのを口実に、一夜を宮の居室近くに過して恋を訴える。宮は受け入れない。宮は古来の風習にしたがつて皇女は再嫁するべきでない、気高く独身生活を貫くことを望んでいる。それは母御息所の素志でもあった。御息所は宮と夕霧とは結ばれたものと誤解し、翌日の夕霧からの消息に、宮に代つて返事をした。ゆゑ、男の愛の永続性を確めようとした。御息所の文を雲井雁が奪つて隠してしまつたので夕霧の返事が遅れる。御息所は、宮が夕霧に一夜の契りて棄てられたものと誤認して衝撃の余り憤死する。夕霧は葬送の事をはじめ万般の世話を懇切にする。求婚の手は相爰らず緩めない。宮は当惑して出家を思い立つが、父朱雀院が諫止する。夕霧は、宮の側近の女房達や後見人の大和守を語らつて強引に宮を一条宮に帰留させ、自身も一条宮に居居わり、凡ゆる術策を弄して、心高く抵抗を続け

ている宮を遂に手中におさめ、喪中に婚儀を行う。雲井雁は憤って実家に帰ってしまう。

夕霧は、「横笛」・「夕霧」の二巻で、雲井雁と共に散文的写実的に描かれている。本来夕霧は第一部以来「まめ人」として、誠実性を強く印象づける方向に造型されて来た。その一途な「まめ人」性が、「横笛」、「夕霧」の二巻では、俗人的方向に再造型され、戯画的に描かれている。その傾向は女二宮に対する恋に関する部分に特に見られる。彼の恋は愚行として描かれているのである。つまりは、脇役的な取り扱いと見てよいだろう。「夕霧」の巻は自然描写が優れている。小野の里の仲秋の景、冬の到来の早い比叡山麓のあわれ深い田園風景、荒廢した一条宮の園池に澄み渡る晩秋の月など、自然美と季節の推移の哀愁の美とが、夕霧の恋情と、孤独な女二宮の傷心の背景として、抒情性を高めているが、一方人間関係は荒涼たるものとして描かれている。前半における母子の間の誤解と齟齬、後半に見られる大和守や女房達のエゴ、夕霧の強引き、雲井雁の直情的、一方的な頑なさ、一人一人の身になって見れば無理もないのだが、この巻の人間関係には、むごい断絶のみが目立つ。その中で心清く生きようとする皇女女二宮の心情だけが、自然の寂寥感と調和して、ひとり精彩を放っている。夕霧の巻は、女二宮の結婚拒否を描く巻と見るべきであろう。その拒否が成らずに終っても——

柏木末亡人女二宮は、兎もあれ身の振り方が決まった。柏木の遺児蕙の境遇の安定は、すでに横笛で確立している。

この様に見て来ると、柏木の密通とそれに続く彼の死の影響を受

けた人人の間に、様々の形で起った波瀾がそれぞれにおさまって行く有様を描いたというところに、「横笛」・「鈴虫」・「夕霧」の三巻に柏木死後の後日譚としての連鎖性が認められる。はじめに掲げた「奥入」の勅物はこの連鎖関係を指摘したものとと思われる。

柏木死後の後日物語を述べている「横笛」以降の三巻の内、「横笛」と「夕霧」の二巻は、夕霧の女二宮思索の成り行きを進展させた点で、また叙事文学的傾向が強く打ち出されている点で、共通の性質を持っているのに対して、「鈴虫」は別種の雰囲気を感じた抒情性の勝った作品である。ことに、「柏木」、「横笛」、「夕霧」のそれぞれに持っている危機感が「鈴虫」には見られないのが見逃せない特色である。

(二)

「鈴虫」の巻は次の様に書き始められる。

夏ごろ、蓮の花の盛りに、入道の姫宮の御持仏どもあらはしたまへる供養せさせたまふ。このたびは、大殿の君の御心ざしにて、御念誦堂の具ども、こまかにととのへさせたまへるを、やがてしつらはせたまふ。

この冒頭の「夏ごろ」とあるのは、いつの夏なのか。兼良の「年立」では「横笛」の翌年としている。以後今日に至るまで諸注みはこの年立を踏襲しているが、三宅清氏・大朝雄二氏・吉岡曠氏は、「奥入」の注記にしたがって「横笛」の同年と見て居られる。私も

上に述べた通り「奥入」の示すところに随うものである。三宅氏は

を逸せぬうちに行わなければならないのであった。「六条院の大池の蓮の花の盛りて、入道の姫宮の寺人開良供養をこそ」と原氏よかぬ

薫の境遇の安定は、すでに横笛で確立している。

この様に見て来ると、柏木の密通とそれに続く彼の死の影響を受

上に述べた通り「奥入」の示すところに随うものである。三宅氏はその根拠として

(1)、柏木を追憶する気持が「鈴虫」にも強い。

(2)、入道宮持仏供養の場で薫を「若君らうがはしからむ、抱き

隠し奉れ」と語られているものが、「横笛」巻で「わづか

に歩きなどし給ふ程なり」とあったものと対応しており、

(3)、女三宮が持仏堂開眼供養を行ったのも宮の出家の翌年の事とする方が自然である。

という三点を指摘して居られる。大朝氏はこれに賛意を表して、更に

「兼良や宣長が、横笛の巻の秋の記事に続く鈴虫の夏の記事を、形式的に整理してしまつた結果、鈴虫の巻を翌年と認定したのは誤りであつたと言わなければならぬのである。そこには物語の内容による連関とは切り離された、年立のための整理といった底の倒錯した意識があるものの如くである。」
と云われているのは卓説である。

上掲の「鈴虫」の冒頭の持仏開眼供養の事実上の主催者は源氏である。仏具一式を新調し経を書かせ、特に入道の宮の持経は、料紙を別に漉かせて源氏自身が春以来入念に染筆したものである。紫の上も仏前の飾りの具や僧服などを準備する。当日源氏は香の焚き方の加減、女房の参列場所の指図まで一切を取りしきって気配りをしてゐる。なぜ作者はこの様ないわば楽屋裏の光景まで記述したのであるか。源氏には女三宮の出家の披露を行う必要があつた。それも機

この年立を踏襲しているが、三宅清氏・大朝雄二氏・吉岡曠氏は、「奥入」の注記にしたがつて「横笛」の同年と見て居られる。私も

を逸せぬうちに行わなければならないのであつた。「六条院の大池の蓮の花の盛りに、入道の姫宮の持仏開眼供養をこそ」と源氏はかねてから計画していたと思われる。重病と言つても、紫の上の場合の様に、「御頂しるしばかりはさみて、五戒ばかり受けさせ奉りたまふ」（若菜下）という程度に止める方法もあるのに。源氏には、女三宮の唐突な出家を、世人が穿鑿し始めないうちに、納得のゆく様な理由のもとに披露する必要があつた。宮の名譽、六条院の名譽、父朱雀院とひいては王室の名譽を守らねばならないからである。

源氏は熱意をこめて女三宮の持仏開眼供養に協力する。その力の入れ様は、供養の場景よりも多くの紙面を領して描かれている。事は急を要した。二年も間をおくことはできない。「夏ごろ」は柏木の一周年と同年、宮の出家の翌年と見るのが当然であらう。

御帳台の上に仏像と共に、源氏の自筆の持経が飾られ、「これをだにこの世の結縁にてかたみに導き給ふべき心を」願文に作らせ読み上げさせる。源氏と宮との夫婦仲は、精神的に一致して全く円満なのだ、参列者は安堵する。更に、才学優れ弁舌爽やかな講師が敬虔に今日の供養の趣旨を申して「この世にすぐれたまへるさかりを厭ひ離れたまひて、長き世世に絶ゆまじき御契りを法華経に結びたまふ」と表白を読み上げると、その尊さに一同は感涙にむせぶのであつた。時が経ち、種種の憶測が流れていけば、人人はこの様な素直な受け取り方をしなかつたに違いない。もはや、六条院の正夫人女三宮の出家は疑惑の目で見られることはない。今上の勅使、朱雀院の御使が派遣され、宮の出家を宮廷側でも祝福されるのが判っ

た。かくして、柏木の生命をかけた恋と薫の誕生の秘密は抹消された。

秋になった。源氏は宮の住む寝殿西面の庭を野の景色に造り変えて鈴虫を放った。鈴虫は松虫よりも声が華やかなので若い入道の宮のために特に選んだのである。源氏は虫の音を聴く態で、しばしば宮の許を訪れて、未練の思を訴えて宮を当惑させる。一周忌が過ぎて半年ばかりであろうが、柏木の事件は時に源氏の心をよぎることはあっても、源氏の生活を破り得なかつた。六条院は華麗な平穩の日々をとり戻している。八月十五日夜、源氏は宮の許で、虫の音を楽しみ、共に経を誦したり和歌を唱和したりする。源氏の歌には出家姿の宮の美しさに心惹かれる恋心が感じ取られる。源氏が琴を弾くと、宮はふと出家の身の上も忘れて聴き入る。夕霧や螢兵部卿宮らが訪れて管絃の宴になった。源氏は、和琴の名手であつた亡き柏木を偲んで、恋しいと語って袖を濡らす。彼のあれ程の生々しい恋も死も既に遠いものになつたのである。源氏の心からだけでなく、柏木は物語の上からも、すっかり過去の世界に遠のいてしまつた。源氏の追憶の言葉に「内裏などにも思し出でける」という一句が挿入されているのは、柏木の生涯が美化された形で宮廷社会に記憶せられてゐることを示唆する。柏木の生涯を賭けた愛執と苦惱は、その生身と共に雲霧消散してしまつた。僅かに一周忌を過ぎたばかりと云うのに、美化された追憶のみが周囲の人人に残るだけという無慘さあわれ深さは悼ましい限りである。

父君朱雀院との保護の下に、俗人の世界の邪心の入り込まない別天

(三)
急に冷泉院からの召しがあつて、源氏は一座の人人を引連れて院の御所に参上する。直衣に下襲を着加えた略装である。院は待ち喜んで詩歌の宴を催される。先刻の御使者のもたらしたお歌に対して源氏は

月かげはおなじ雲るに見えながらわが宿からの秋ぞかはれる
と返歌申し上げた。「君は春秋に富み臣漸く老ゆ」の意であろう。しかし、明月に照らされた冷泉院と源氏の容貌は、全く酷似している。夜を徹して楽しまれた詩歌の宴の情景は記事がなく、「その夜の歌ども、唐のも倭のも、心ばへ深うおもしろくなん。」「明け方に文など講じて、とく人々まかたまふ。」と簡単に片づけられて

六条院の鈴虫の宴を、冷泉院の詩歌の宴に直接し、しかも冷泉院と源氏を月光の下に対座させて、その容貌の酷似を名月よりも詩歌の宴よりも、優先的に取り上げているのは、二組の、密通事件と密通によつて誕生した子との顛末を、対比的に、重ね合わせて眺めるためであろう。作者のその意図は、この巻の主要登場人物を、前半は源氏と女三宮、後半は源氏と冷泉院としぼつてゐることからしても明白である。

柏木の女三宮に密通した事件は、源氏によつて手際よく抹消された。女三宮は出家の原因を世人から疑われることもなく、夫源氏と

したのであつた(若菜下)。それを、作者はこの巻でくり返して、

と云うのに、美化された追憶のみが周囲の人人に残るだけという無惨さあわれ深さは悼ましい限りである。

父君朱雀院との保護の下に、俗人の世界の邪心の入り込まない別天地を確保してもらって、恐らく六条院降嫁以來始めてと言つてよい安定した生活に入った。薫は源氏の子として育てられてゐる。源氏は薫の気高い美貌を見ると、寧ろ自身に似ているかと思う。

わが御鏡の影にも似ながら見なされたまふ（横笛）

そしてわが子として育てることに宿縁を感じている。

この人の出でものしたまふべき契りにて、さる思ひの外の事もあるにこそはありけぬ。のがれ難かなるわざぞかし（同）

薫の出生の当初には、藤壺との間に子を持つた若き日の罪の応報かと思つて恐れを抱いたこともあつた。また

さてもあやしや。わが世とともに恐ろしと思ひし事の報なめり。

この世にて、かく思ひかけぬ事にむかはりぬれば、後の世の罪もすこし軽みんや（柏木）

源氏は不義によつて生れた他人の子を我が子として養育する連合に遭遇したことで、来世の罪が軽減するだろうかと思つた時もあったが、「横笛」以降には、源氏に応報意識は見られない。薫に、父子として暮らす宿縁を感じて、明石女御所生の皇子達と同じ取扱ひをしている（横笛）。柏木の死後、その密通事件は、柏木の独り台点であつたかの様に抹消されて終つた。源氏が藤壺に捧げた恋は、晩年に、冷泉院との実父子間の情愛の交流という温い結末を与えられる。源氏と柏木の密事は、その質をも価値をも異にすることを、作者が信じているからであらう。

冷泉院は天子という身分の制約を受けない生活が望ましくて退位

柏木の女三宮に密通した事件は、源氏によつて手際よく抹消された。女三宮は出家の原因を世人から疑われることもなく、夫源氏と

したのであつた（若菜下）。それを、作者はこの巻でくり返して、院の心の内に踏み込んで述べている。

院も常にいぶかしく思ひきこえたまひしに、御対面の稀にいぶせうのみ思されけるに急がされたまひて、かく心やすきさまに

と思しなりにけるになん（鈴虫）

院は、源氏を実父としりながら帝位にある故に容易に対面できないのを辛く思つて、退位したのであつた。源氏もまた、家門の榮譽を代表して今を時めく明石の女御よりも、間然するところなき嗣子夕霧よりも、この秘密の妻冷泉院に寄せる思いは格別深いのだと作者は述べている。藤壺と源氏との間に生れたのが冷泉院だということを知るのは今は恐らく当の親子だけであらう。秘密は完全に保たれて来たのである。それなのに作者は齒に衣を着せぬ言い方で、二人の真実の間柄を語る。読者の心に藤壺との恋を再登場させる。ここまで読んでわれわれは始めて、女三宮と柏木の密通事件が、藤壺と源氏との密通事件の変奏曲であつたことに気付く。女三宮・柏木の事件が解決した時点で、作者は藤壺と源氏の密通事件を再登場させ、源氏をわが人生に対する深い感慨に誘ひ込むのである。

(四)

最後に、「鈴虫」の巻における源氏の年令について一言したい。

「柏木」では源氏は四十八才である。薫の五十日の祝儀の条の本文にそう記されている。

「静かに思ひて嗟くに堪へたり」とうち誦じたまふ。五十八を十とり棄てたる御齡なれど、末になりたる心地したまひて、いともあはれに思さる。

翌年の「横笛」では四十九才。「鈴虫」は「奥入」と「奥入」の説を踏襲した「河海抄」に「横笛之同年夏秋也」とあるのに随えば、同じく四十九才となる。大島本「奥入」に

みのり 此巻 夕霧之後年歌

六条院五十 紫上四十三(中略) 二品宮若君三歌

とある。「夕霧」の注には「今案此巻猶横笛鈴虫之同秋事歌」とあるから、「鈴虫」で四十九才となる。兼良の「年立」によって「鈴虫」を「横笛」の翌年とすると、「鈴虫」における源氏は五十才となる。「花鳥余情」以降現代に至る注釈書解説はみな兼良の「年立」に拠って五十才としている。上に述べた通り、私は定家の「奥入」の説を探るものであるから、「鈴虫」の各場面に描かれている源氏の年令を四十九才と見る。僅々一才の差であるが、瑣末な問題ではないと思われる。

風すこし涼しくなりゆく夕暮に渡りたまひつつ、虫の音を聞きたまふやうにて、なほ思ひ離れぬさまを聞こえ悩ましたまへば 尼姿になつた女三宮は、却って魅力的に見える。源氏は、初秋の涼風の立ち初めた夕暮に女三宮の許を虫の音にかこつけて屢屢訪れては、今なお思ひが断ちきれないと訴える。源氏が、この情景に四十九才であるのと、五十才であるのではすっかり趣が異なるであろう。当時としては五十才は老人である。色好みが、美的である限界

外観だけでなく、心理的にもまだ瑞瑞しい多感さを残していて、それ故に動揺し易いところもある四十九才の源氏である方が、この

を通り越して、いやらしさを感じさせる。たとえ、年より若く見えるとこの物語に度度述べられて来た美男の光源氏ではあつても。作者がここに述べているものは、事件が進展して次はどうなるかという様な叙事文学的な興味に関する事柄でない。抒情的な静止的な一光景である。秋草の咲く前栽を前にした、絵巻の中の一情景の様な入道姫宮の御前に、初秋風にふと人恋しさを誘発された男君を対座させる。この場面の男君は、瑞瑞しさを残していなければ様にならない。

「故権大納言、何のをりをりにも、亡きにつけていとど偲ばること多く、公私、ものをりふしのにほひ失せたる心地こそすれ(略)」などのたまひ出でて、みづからも、搔き合はせたまふ御琴の音にも、袖濡らしたまひつ。御簾の内にも耳とどめてや聞きたまふらんと、片つ方の御心には思しながら、かかる御遊びのほどには、まづ恋しう

源氏は自分から柏木を話題に持ち出して恋い偲びながら、ふと御簾の内の女三宮が柏木を思い出しいるだろうと心を動かす。若さという点で敗北感を味わされた今は亡き柏木に、一瞬嫉妬の炎が心中心でかき立てられる。この場面も、源氏が五十才という老齡に達していない方が美的である。

ねびととのひたまへる御容貌、いよいよ異ものならず。

冷泉院は三十才を少し離れたばかりの年齡、その人が源氏と対座している場面で、二人が瓜二つの顔容をしているというのが、源氏が四十九才であるのと、已に五十才に達しているのでは、全く精彩が異なるだろう。

では、今なお思いが断ちきれないと訴える。源氏が、この情景に四十九才であるのと、五十才であるのではすっかり趣が異なるであろう。当時としては五十才は老人である。色好みが、美的である限界

している場面では、二人が互いの顔を凝視している。源氏が四十九才であるのと、已に五十才に達しているのでは、全く精彩が異なるだろう。

外貌だけでなく、心理的にもまだ瑞瑤しい多感さを残していて、それ故に動揺し易いところもある四十九才の源氏である方が、この巻に知的性格と抒情性の香気を漂わせる要素を、より多く、より美しく提供するだろう。一年のちがいであっても、この物語が主人公源氏の年齢を筋の展開の上で重視して来た点からも、私は奥入の年立にしたがって、「鈴虫」を源氏四十九才の秋と解する方が、遙かに自然らしい感じと思う。そして第一部のフィナーレ「藤裏葉」の源氏三十九才に対応して、第二部の物語の中心主題を「まず収束する、と理解する面白さをも味わい得ると思うものである。その上、もう一つ見逃せない強力な傍証が存在する。「鈴虫」の巻でもし源氏が五十才を迎えているなら、比較的平穩なこの年にせよ誰一人として源氏の五十の算賀を言い出しも思い付きもしないのだろうか。「奥入」の勅物に見る様に源氏が「御法」で五十才を迎えるとすれば、紫の上の重病と、それに続く死とで、賀宴は流れてしまったという解釈が成立する。しかも何よりも、「鈴虫」の巻を成立させている。私は美的根拠上から「鈴虫」の源氏が四十九才であるとする説を採ろうとするものである。

注1 「源氏物語大成」第七巻研究資料篇所収「定家自筆本奥書」

2 日本古典文学全集「源氏物語」の本文に拠る。
以下引用本文同じ

3 三宅清氏「源氏物語の構想」

大朝雄二氏「並びの巻攷」(古代文学論叢第一輯)

吉岡曠氏「横笛・鈴虫」(源氏物語講座第四巻)

△本学教授▽